水曜の夜、中崎町にて

谷山　結子

この春から、性懲りもなく中国語教室に通い始めた。これで三度目である。最初に習ったのは二十年前。そのときは七年ほど通ったが、まったくものにならなかった。中国語に興味を持ったきっかけは、香港映画『インファナル・アフェア』である。二〇〇三年の公開当時、映画館で観てストーリーの緻密さに衝撃を受け、日本語字幕なしで理解したいと思った。広東語と普通語（いわゆる標準語）は全く別の言語だと知るのは、ずっと後のことである。

二度目に習ったのは今から二年前。二十年前と同じく、講師は中国語のネイティブスピーカーで日本語も堪能。授業はフリートーク主体で、「今週の出来事」「最近ハマっていること」といったテーマで生徒が一人ずつ中国語でしゃべり、講師が発音や文法の間違いを訂正する。週に一度、つたない中国語（しかも日本語の多々混じった）を披露し合うだけで終わってしまい、予習・復習をしなくても何とかなるため、サボりグセがついてしまった。

一年通ったところで教室を辞め、この一年はラジオの中国語講座を聞くだけになったが、日本人講師の見事な解説の虜になった。日本の中国語学習者がどこでつまずくのかを熟知し、こちらが疑問に思っていること、まさにそれを聞きたかったというようなことをピンポイントで解説してくれる。理屈が分からないと先に進めない自分にはぴったりの内容。タイムフリーでラジオ講座を繰り返し聞くうちに、自分と同じ立場の（つまり日本語を母語とする）教師に直接習いたいという思いが募った。

今年の三月、大阪市北区は中崎町にある語学学校の入学案内が目に留まった。入門クラスの講師は日本語のネイティブスピーカー。本格的に学びたい人が行く学校なので授業についていけるかどうか不安だったが、半年前に読んだ長澤信子さんの本に背中を押され、ひとまず無料体験講座（全四回）を申し込んだ。長澤さんは三十六歳から中国語を学びはじめ、四十歳で中国語通訳になった人である。本を読んで、大人になってからの語学学習は、やるもやらないも自分しだいだということを再認識した。

体験講座は「へ～」「ほ～」の連続。中国の民族、方言の紹介に始まり、簡体字やピンイン（発音のローマ字表記）の誕生した経緯、今のようなラジオ講座もＣＤもない時代にどのように中国語を学習したかという講師自身の体験談。ひとことも聞き漏らすまいと集中したせいか、夕食ぬきでも空腹を感じない。学校創立は一九五六年。日中の国交が正常化されるずっと前である。当時の生徒募集ポスターも見せてもらった。入学の特典は中国旅行とある。今の時代とは重みが違う。国交がなくても旅行はできることを初めて知った。

外来語の漢字表記についての講義も興味深かった。日本語にはカタカナがあるが、中国語は漢字に置き換えるしかない。ソニー、シャープ、グッチ、シャネル、サンドイッチ、コカ・コーラ、ビートルズは中国語でどう書くか。講師自身も、日本の某企業から依頼されて社名（カタカナ）の中国語表記を考案したそうだ。聞けば、誰もが知る世界的な大企業だった。

無料体験講座の最終日は参加者が一気に減った。入学しないという意志表示である。一方、入

学しないと言うために、わざわざ菓子折りを持参した男性がいた。講座終了後、男性は菓子折りの紙袋を講師に差し出しながら「僕は勉強が嫌いなんです。ごめんなさい」と三回は言った。一度も休まず熱心に受講しているように見えたので、意外だった。私も勉強は苦手だが、ここでは勉強というよりワクワクする時間を過ごさせてもらった。知らないことを知るのは純粋に楽しい。男性にとってはそうではなかったということか。彼と講師の互いに相手を慮（★おもんぱか）るやりとりを目にしながら、自分はこの学校でやっていくぞという意志がどんどん強固になるのを実感した。

四月、入門クラスに入学した。毎週水曜日、午後六時半から二時間の授業。仕事を定時であがれば、ぎりぎり間に合う。生徒は自分を含めて四人。そのなかで唯一、中国語の学習歴がある私は他の三人より少しだけ先を行っているが、それぞれドイツ語、英語を勉強中という女性ふたりには早晩、追い抜かれるだろう。日本語しかできない自分よりも、外国語学習の習慣がすでに身についている彼女たちの方が中国語の上達も速いと思うからだ。しかも、ドイツ語の女性が中国語を学ぶのは「推し」ができたからだという。

休憩時間になると彼女はいつも「推し」ている中国の芸能人男性の配信動画をチェックする。彼が喋っている内容を理解するのが目標だそうだ。こういう人が外国語を学ぶうえでは最強だと思う。先生も「何かしら中国の好きなものを見つければ、みるみるうちに上達しますよ」と勧める。「映画の『インファナル・アフェア』が好きなんですが、どうでしょうか」と私が聞いたら先生は大笑いした。誰かこの映画の普通語バージョンを制作してくれないだろうか（ただし俳優の声は出演者本人のもので）。

もう一人のクラスメイトは七十七歳の知識欲旺盛な男性。仕事はすでに引退し、その気になればいくらでも勉強する時間が取れる。この人たちに置いていかれないようにしなれば。学費は一年分を一括で前納し、後には引けない状況を作った。

中崎町界隈は歩くだけで楽しいところである。古い町並みと新しい店の融合。静かで賑やか。個性的な雰囲気が好きだ。毎週通うならばと行きたい店をいくつかピックアップしていたが、いざ授業が始まると疲労困憊でまっすぐ帰宅。もう少し気持ちの余裕ができたら、月に一度くらいは夜の中崎町を散策したいと考えている。